発達勉強会

日時：令和 4 年 10 月 22 日（土）　　テーマ：『行動支援の基本的理解』　　報告者：松田

【行動支援の基本姿勢】
・子どもが気になる行動をすると大人は困りその行動を減らそうとするが、**困っているのはこども**であることを認識する。
・子ども自身が望ましい行動に気づけるよう肯定的・具体的に関わるのが支援者の役割である。

【ASD における診断と評価】
・障害のある子どものアセスメント…子どもの強いところと弱いところを注意深く調べる。
・目的…子どもを理解し、その子に最も適している個別の教育プログラムを立てること。
・一人ひとりの特異な学習スタイルを見極めるよう計画されたアセスメント方法が必要。
・本人の強み・弱いところが分かった後、苦手なことにどうアプローチしていくかも評価の大切なポイント

【関わりのポイント】
１．トップダウン：環境設定、支援、配慮…周りが背景に応じた関わり方の工夫をする。
２．ボトムアップ：指導（個別）…自分自身の得意・不得意を知り、よりよい生き方の工夫を身につける。

【アセスメント】
・対象となる方の等身大の多面的な評価と同時に、分かるように出来るように支援できているか、支援者側が不適切な行動の引き金を作っていないか考える必要がある。
・本人の特性と支援者の対応を含めた環境の２つの側面を評価する必要がある。

【環境設定】
・適切な行動が多く出現するようにつまずかない状況を作る。苦手な部分を補う。
・人による支援…関わり方の工夫　　・物による支援…道具による工夫
「この活動はできない」ではなく、できることで参加し、できた経験を積み重ねるよう対応し、最終的には一人でできることが目標。

【行動のメッセージ性の理解】大声を出す場合
要求行動：大声を出したら欲しい物を得たりやりたいことができる。
逃避行動：大声をだしたら、したくないことから逃げ出せる。
注目行動：大声を出したら、先生や友達がかまってくれる。
自己刺激行動（感覚）：大声を出し続けているのが心地よい
※必ず自分にとってメリットとなる周囲の反応があるからこそ、その行動はなくならない。

【支援者の役割】
・気になる行動を『何でだろう？』と考え、つまずきの背景（根拠）として特性によって起こり得るメッセージであることを把握する。
・一つ一つの行動をできるだけ具体的に挙げ根拠に基づいた説明を行い、関わる人が共通理解できるよう丁寧なアセスメントを基に支援方法を考えることが大切である。